

---

 PBeM『VOiCE』第6回リアクション  
 06-F 幼猫期の終り
 

---

## ●「猫になるほうがうまいもの食べそうだし」

最近なんだか騒がしい。理由は簡単だ。猫の下僕たる人間たちが慌てふためいているからだ。

まったく騒々しい。

下僕は落ち着きがない。

それは、猫が下僕に対して改めてほしい部分だった。他にも改善点を挙げれば、すべての肉球の数を上回るほどだが、猫は慈悲深く、なるべく追及しないようにしていた。欠点は誰にである——問題があるとすれば、下僕のそれは多すぎるということだ。

猫は、ふああ、と大きくあくびをひとつ。

それから、ぐい、と伸びた。右足、それから左足。背筋を伸ばすと、おもむろに顔を洗う。

世はなべてこともなし。

猫が猫であり続ける限り、この世界は果てまで猫のものなのだ。何をそんなに騒ぐのか。

「あっ、いたいた、こんなところに！」

下僕の声が聞こえる。やれやれ、仕方ない。ちょうどなにをしようか、考えようと思っていたところだ。下僕をかまっでやるのも、支配者たる者の務めだろう。

「にゃーん」

甘えた声で、足下にすり寄ってやる。とたんに下僕は目尻を下げ、文字通りの猫なで声で話しかけてくる。

「ねえねえ、これから地球との会談なんだって。あんな子どもがちゃんと話せるのかねえ。指名されたんじゃ仕方ないけど……ほら、一緒に中継見ましょうねえ」

その言葉を聞き流しながら、猫はぼんやり考える——今日は何して過ごそうか。

## ●「一言でいえば、猫は優秀なんだ」

白戸さざりは猫である。

正確には猫と呼ばれるものである。

見た目は、人間と変わらない。だが、その魂も体も猫である。ゆくゆくは、人間とこの地を支配する者として、下

僕たちの上に立つべき存在である。しかし、今はまだ子どもだ。だから毎日学校にも通うし、食事の好き嫌いを言えば叱られる。理不尽ではあるが、立派な猫になるためには必要なことなのだ。

本来であれば、さざりはそのまますくすくと育ち、大人の猫として猫の社会で自立するはずだった。ところが、先月「地球」とか呼ばれる場所から来た人間たちによって、さざりが住むふたつの丘を含め、あちこちで騒ぎが起きている。

いわく、地球からの来訪者はこの地に住む人間たちの祖先でもあり、また同族である。ふたつの丘を始めとする都市群に住まう人々は、はるか昔に地球を出て、どこか遠くに引っ越そうとしていたら、うっかりこの地に落ちたのだという。

間の抜けたことに、地球はこの地に落ちた人々の生存を絶望視し、すっかり死んだものだと思っていたらしい。それが、何がきっかけだったのか、生きてると知り、大慌てで駆けつけた。

さざりから見れば、うっかりというレベルを超えた、粗忽極まる下僕だという印象でしかない。だが、両親たちやそのほか大人の猫たちにしてみると、それは「第二次侵略」という位置づけであるらしく、毎日毎晩ぴりぴりとした雰囲気会議が続けられていた。

「さざり、今夜はおまえも来なさい」

父に促され、さざりは夜更けに家を出た。母は、自宅に待機している。万が一の事態に備えて、人間形態をとれる猫たちは、情報収集に専念していた。さざりが日常的に使っているタブレットもモバイルも、猫の肉球では実に操りづらいのだ。あんなもん、平べったい座布団だ——と長老猫がぶつくさ言っていたのを、さざりは聞いたことがある。

今夜の集会も、さざりが予想していた通り、何らかの結論が出るどころか、そもそも堂々巡りで終わりそうだった。「今こそ、壁の向こうにいる同志たちと結託して、人間に鉄槌を下すべきだ」

「いや待て、奴らは数だけは多い。分散させるべきだ」

「奴らを同士討ちさせて数を減らそう。勝手に討ち滅ぼし合えばいいのだ」

「開戦は早急すぎる、今はまだ情報収集をすべきだ。無駄死には出したくない」

さざりは、小難しそうな会話をぼんやり聞くとともにしに聞いている。まったくもって、さっぱり意味がわからない。「さざりよ、おまえはどう思う？」

不意に、煮詰まった会議に疲れたのか、長老猫のひとりがさざりに問いかけた。いらだちと焦りが混ざった視線が、

さぎりに集中する。

「どうって？」

「人間への対応だ」

「んー」

さぎりは首を傾げ、今まで思っていたことを、何気なしに口にした。

「地球とかいうところにも、下僕がいるみたいだけど、猫のほうの上だってわかってる人、いないみたいだね」

長老猫が口を開きかけたが、ややあつて閉じた。

「これって僕らの落ち度かなーって思うんだ」

「落ち度？」

怪訝そうに、大人の猫が聞き返す。

「そう、だってさ、人間は猫の下僕だけど、それってあんまりにも当たり前すぎて、かえって誰も言わないじゃない？」

きっと地球の猫は、人間をきちんと管理してやっていないんだよ。……いや、もしかしたら、もういないのかもしれない。何せ、あれだけ大ボケかますような人間だもの、愛想も尽かすよ」

さぎりが言うと、大人たちは顔を見合わせた。

「た、たしかに、その可能性もないとは言えないな……」

「おいおい、子どもの言うことを真に受けるのか？」

「しかし、話を聞く限り、相当間抜けなことには変わらないだろう」

「あんなの面倒見ると言われたら、困るな」

「うむ」

「ごめんこうむるな」

さぎりは大人たちを見回すと、再び口を開いた。

「きっとね、地球には猫の管理が行き届いてないんだ。だから、ぼくたちはかわいそうな地球の人間たちを導いてやらなくちゃ」

めんどくさいけど——ぼつりとさぎりは小さく付け足した。

## ●「猫だと言ってやれば？」

冬の風は冷たく、手袋なしでは指先がしびれそう。幸い、今日は天気がいいので、風さえなければ、比較的暖かく感じる。水無月千鳥は、慣れた足取りで校舎裏の雑木林を歩いていた。夏にはあれほど生い茂っていた葉はほとんど枯れ落ちた。今は枝先でかさかさ揺れる数枚がある程度だ。

「あ」

予想通り、千鳥が探していたものは、そこにいた。冬の日差しを受けて、丸くなっている。いつ見ても器用だと思ふ。不安定なハンモックの上で、バランスをとって、まるで猫のように眠っているのだ——本人曰く、「だって猫だから」らしいが。

「さーざりちゃーん」

ハンモックに駆け寄ると、千鳥は景気よくハンモックを揺さぶった。ぼさぼさと枝が揺れ、ハンモックが悲鳴を上げる。

「う、うわっ、何をする！」

「おはよー、さぎりちゃん」

さぎりの機嫌は悪そうだったが、千鳥は気にしなかった。世の中には、朝起きるのが苦手なテークツアツという人がいるらしい。きっとさぎりもテークツアツなのだ。その証拠に、千鳥がたたき起こすと、いつも機嫌が悪い。

「でもそんなの関係ねえ！」

千鳥は、以前授業で見た古典芸能の踊りを真似て、己を鼓舞した。

「……嫌な予感しかしないけど、一応聞こう。何の用だ？」

「騒いでるだけじゃ、何もしないのと一緒だよねえ？」

「あとどれくらい経験値を貯めたら、《順序立てて話す》スキルが身に付くんだろうな……」

「猫ちゃんって人間じゃないよね」

「そりゃそうだろう。どうして猫が人間なんだ」

「でもさ、さぎりちゃんはさぎりちゃんだよね？」

「うわあ禅問答きた」

「だからねえ、さぎりちゃんがさぎりちゃん、猫ちゃんが猫ちゃんなのって、わたしとさぎりちゃんの髪の色とか目の色が違うのと同じように、それだけのことだと思うの」

「いや、いろいろ違うような気もするが」

「でね、猫ちゃんはどう思ってるのかなって。気になったの。大人の人たち……ってというか、人間はなんか騒いでるけど、猫ちゃんはずっと変わらないし」

「聞いている？ ねえ聞いている？」

「猫ちゃんたちはどう思ってるのかなあ。さぎりちゃん、聞いてきてよ。猫でしょ」

「そりゃあ、ぼくは猫だが」

さぎりは呆れたようにため息をつく。

「猫は猫として生きてるだけだ。後は人間が勝手に全部やるだろう。人間とはそういうものだ」

「うーん、そうなの？」

「そうだ」

「そっかー」

千鳥は納得がいったような、いってないような、複雑な面持ちで首を傾げる。さぎりは、千鳥を見て言った。

「まあ、気になるなら猫に直接聞けばいい。ぼくの友だちに抱っこされるのが好きな変わり者がいる。抱っこしながら、そいつにも聞いてみたらどうだ？」

「えっ、いいの!？」

「ああ、いいとも」

「もふもふしていいの!？」

「ああ、当然」

「もっふもふ!？」

「超もっふもふ。ゴージャスもっふもふ」

「もっふもふー!!」

大はしゃぎの千鳥を見て、さぎりは薄く笑う——忠誠心を育むなら幼少期から。

猫はこの世の王だ。何も案ずることはない。面倒ごとはすべて下僕たる人間がやるべき仕事だ。猫は、ときどき「にゃーん」とか言って、人間にすりすりごつつんするだけで、忠誠心を呼び覚ますことができるのだから。

「もっふもふー!」

ああ、世はなべてこともなし。

### ●「猫は常に正しい。おれ、主人公」

青い空に、一筋の白い煙がまっすぐ、天高く昇っていく。その軌道にぶれはなく、雄々しささえ感じさせた。まっすぐ地球に向かう船は、すぐに見えなくなった。

あれから、地球とふたつの丘は、頻繁に人間が行き交うようになった。かつて通信や移動を妨げていた磁気嵐が止み、交流に支障はほとんどなくなったという。

「まあ、猫にはどうでもいいけど」

さぎりは、目を細めた。大人になれば、星間渡航許可証も手に入る。そうすれば、地球へ行くのも簡単だ。地球上にも、猫の、猫による、猫のための世界を作るために、さぎりは征かねばならない。

その日は、そう遠くない。

だから、今はまだ眠る。

まだ見ぬ地球に、猫たちの声が響きわたるのを想像しながら、さぎりはふたたびまどろみに沈んでいった。

未来のことは誰にもわからない。

さぎりは猫であり、そしてまだ子どもだった。

だから、血気盛んな若者たちが、それでもなお、と拳を振り上げ、牙をむくであろうことに気づけもしなければ、また止める力も——そもそも、その気がなかった。

地球との交流は進んでいる。一方で、あくまでも地域の問題としてだが、野生の猫が問題視されるようになっていた。チップを埋め込まれていない、街の外周部に生息する猫たちが、時折人間を襲うようになったのだ。

ある日、とある数匹の猫——といっても、もちろんさぎりの同類だ——が、人間の家に忍び込み、寝ていた赤ん坊の首を噛みちぎった。不幸にも発見が遅れ、赤ん坊は結局死んだ。

当然の成り行きとばかりに、徹底した野良猫駆除が行われ、街の外周部から猫の姿が消えた。

あの数匹の猫たちは、どこにいったのだろう。

さぎりは今でもふと思い出すことがある。

「猫には生きにくい世界だ」

誰かがそう呟いた、その声を。

### ■ マスターより

・ご参加いただきありがとうございました。

### ■ 登場 PC・NPC一覧

- ・白戸さぎり
- ・水無月千鳥
- ・猫たち